

ファーレ立川のワークショップに寄せて

ファーレ立川に1994年に設置されている《TACHIKAWA BOX》は、それに先立つ同年のヒルサイドギャラリーの個展「Calldar hal ship Project」の一部として展示しました。少し長くなりますが……その個展で《TACHIKAWA BOX》が最初に発表されたときは、水槽の作品と透明なチューブでつながれ床に置かれていました。水槽の天板には希硝酸水の入ったガラス管が差し込まれていて、天板から水槽内の銅製の船に向かって「酸性雨」を降らせる仕掛けがしてありました。透明な希硝酸水は銅に触れると鮮やかなブルーに変色しますが、そのようにして水槽にはブルーの希硝酸水が溜まり、その上に船が浮いていました。水槽内にはその化学反応で二酸化窒素というガスが生じますが、そのガスや一部の「酸性雨」が水槽側面にあるチューブから、床に置かれたこの《TACHIKAWA BOX》に送り込まれます。そうして、その酸やガス(自動車の排気ガスと似た成分)の痕跡が《TACHIKAWA BOX》の内にある白いゴムで覆われた基底部にシミや変色として刻まれました。

これは常にそのような環境にさらされている都市の痕跡をこの作品に与えています。そして《TACHIKAWA BOX》のこの基底部の上には、ファーレ立川が開発される以前の、この土地の区画割りを示す地図と1994年当時のものを透明の板に刷り重ねています。その一部には開発以前のこの土地に生息していただろう植物を透明の樹脂に封印し、その幾つかをサンプルとして作品内に設置しました。また、開発以前の街の「賑わい度」などを表現する独自につくった円形と丸を使った記号を地図上にマーキングしてあります。そしてこれは未完となりましたが、この作品が地図としても利用できるような作品(構想ではファーレ立川内のアートワークの場所を書き込みアートマップとして使用できる可能性がありました)を考えていました。また作品内に設置してあるチューブや透明な管などは、最初の水槽作品との関連を示す装置だと言えます。以上、この作品によって幾つかのレイヤーをもつ「都市の記憶の雛形」を提示したいと思っていたのです。

今から思えば、今回のワークショップでも行う、「カセットプラント」のアイデアは、実はこの作品から契機となって樹脂に植物を封印するプレパラート状のパーツをつくる作業から始まっていたと思えます。今回のファーレ立川のワークショップは、その里帰りのような気持ちが作家自身にはあり、そのようなことも含めてお伝えしたいと考えています。

2019.8.4

山口啓介